

## 第一章

### 序論

#### A. 背景の問題

言語は、両方の口頭および書面で他の人にアイデア、思考、意図、目的を伝えるために最も効果的なコミュニケーションツールである。このように、言語学習者は、両方の言語（母国語）だけでなく、外国語を所有している言語に深さや行動の研究に学ぶ必要がある。

研究者は、日本語学習者の一部で、インドネシアでの需要の中で最も外国語としての英語の後に日本語のランク第二言語。ほかにインドネシア語と同盟ではないので、日本語は複雑で知られている、言語は非常に多くまた、語彙の量を文字仮名や漢字を使用し、文の構造が異なっている。それは、特に等価翻訳の観点から、疑う余地マスタリング日本語の学習者のための障害となっていないインドネシアへの右の単語を見ているようである。

翻訳の過程で提出された情報を低下させることなく、ターゲット言語にソース言語からの情報の転送が要求されると、彼は

オリジナルの作品を読んでいたかのようにリーダーを作成することができる。Nida と Taber (1989 : 11) による、翻訳の定義は以下のとおり：

*「Translating consists in reproducing in the receptor language the closest natural equivalent of the source language message, first in term of meaning and secondly in terms of style.」*

日本語を含むと、特に話し言葉や会話の中で重点を置いて豊かである。日本語の会話文は終助詞と呼ばれる最終的な助詞が刻印されている。松村(1995: 316)によると終助詞は定義が、次のようにである。

文の終わりにあって、文を完結させ、同時に感動、禁止、疑問、反語、願望、強意などの意味を表す助詞。

また、松村によると終助詞を二つに分け、それは古語では、「な、そ、ばや、なむ（なん、なも）、もがな（もが、もがも）、かな（かも）、かし、か、な（も）、よ」、現代語では「な（禁止）、な（感動）、か、とも、よ、ね、さ、ぜ、ぞ」などの各語が挙げられる。

機能に従って使用され、終助詞は常に文の終わりにスパイクでなく、句の後ろに挿入することができる。終助詞は単独で立つことはできない。文に固執する必要があり、その意味を持っており、文全体の雰囲気醸し出している。

日本語の会話で使用される多くの終助詞から、非常に高い周波数を使用する一部の人がある。二つのは「よ」と「ね」である。これは漫画めぞん一刻 1 巻 (1982)、「な」、「ね」、「わ」、および「よ」に表示される最も頻繁に四つの終助詞を分析することによって、著者が行った先行研究の結果によって補強されている。結果は、次の表で見ることができる。

表 1

終助詞	回数	比率
よ	164	43.15
ね	121	31.84
な	55	14.47
わ	40	10.52
全額	380	100

「よ」と「ね」いくつかの同様の機能を持つため、強調のニュアンスがさまざまなのに最も頻繁に使用される。(第二章で説

明される)。さらに、ユニセックスとして使用することができたり、男性と女性で使用することができニュートラル終助詞は「ね」、「よ」、その二つをマージし「よね」であり、男性と女性の印象は、まだ使用中であるがときに、特定の文の構造内に存在する。(川崎 & McDougal: 2003)

インドネシア語にも終助詞がある。ハエルが強調の助詞を名づける。すなわち、ことばを強める「*-lah*」、「*-tah*」、「*-kah*」である。けれども、インドネシア語の終助詞と日本語の終助詞は違う。だから、インドネシア語での終助詞は日本語の終助詞の匹敵ではない。日本語の終助詞の近寄る匹敵はインドネシア語のファティックカテゴリーである。(第二章で説明される)

本研究で筆者は、インドネシア語のファティックのカテゴリに対等する「よ」と「ね」の分析を行う。ひとつの終助詞はひとつの単語のみファティックカテゴリーと組み合わせることはできない。たとえば、「よ」はいつも「*Iho*」に対等することができない。たまには「*kan*」、「*dong*」、「*sih*」など対等することもできる。以下の文章のいくつかの例を参照してみる。

1) あいつも仲間に入るってよ。

(*Dia juga anggota lho.*)

2) 手伝ってよ。

(*Tolong bantu dong.*)

3) いったい今までどこで遊んでいたんだよ。

(*Sampai saat ini, di mana saja kau bermain sih?*)

(野本 *et. al*, 1988: 1350-1351)

文上の例を見たら、すべての三つの文は、「よ」につけるが、現実的のように説明するとき、別の意味を引き出す。同様に、インドネシア語に対等するときも、一つだけのファティック助詞に見合っていない。それはすべて、それぞれの言語自体の文のコンテクストと関係がある。

間違いを避けるために、特に翻訳の過程に、インドネシア語のファティック助詞に翻訳された「よ」と「ね」を分析することが必要である。

## B. 問題の範囲

説明された問題の背に基づいて、本研究では、実用的に日本語の文章の「よ」と「ね」の使用を検討し、そしてインドネシア語のファティック助詞に翻訳された文を分析する。本研究では問題の定式化は次のとおりである。

- 1) 言語学的な「よ」と「ね」の機能は何か?
- 2) 「よ」と「ね」はどのようにインドネシア語のファティック助詞に翻訳するか?
- 3) 「よ」と「ね」はインドネシア語に翻訳するとき、不規則なまたは間違った翻訳があるか?

本研究の問題の範囲は次のとおりである。

- 1) 本研究では日本語の「よ」と「ね」の使用法とインドネシア語のファティック助詞の意味と機能を分析する。
- 2) 形や文のコンテキストに基づいて、語用論の観点で単語の意味を分析する。

### C. 研究の目的

本研究の目的はつぎのようにである。

- 1) 「よ」と「ね」の機能と意味を説明する。
- 2) 「よ」と「ね」に対等することができるインドネシア語のファティック助詞を知っている。
- 3) 「よ」と「ね」の対等としては、このファティック助詞はぴったりであるかどうか知っている。

### D. 研究の意義

本研究の意義は次のようである。

- 1) 言語教育、特に日本語の開発を役に立つ。
- 2) 日本語学習者が「よ」と「ね」とインドネシア語のファティック助詞を理解しやすくなることについて、役に立つ。
- 3) この研究の結果は、正しいニュアンスでインドネシア語に「よ」と「ね」を翻訳する日本語学習者や翻訳者への配慮として使用することができる。
- 4) 学習者が次の終助詞について研究を行って、本研究は参考文献として使用することができる。

## E. 研究方法

使用される方法は、定性的な記述方法、次を使う。

- 1) さまざまな資料から会話文につける「よ」と「ね」のデータを収集する。
- 2) そのデータからインドネシア語文につけるファティック助詞に翻訳されたのを収集する。
- 3) 作用に基づいて、「よ」と「ね」とファティック助詞の機能と意味を分析する。
- 4) データの分析結果を提示する。

### データ資料と研究の用具

本研究で使用された用具が研究のオブジェクトに関連付けられたデータと一緒に書籍や研究ジャーナルや記事や先行研究である。データは筆者に選ばれた資料である。すなわち、「よ」と「ね」をつける日本語の会話文とインドネシア語に翻訳されたその日本語の会話文である。

### データ処理技

著者は、参照として扱われる問題をサポートすることができ、他のリソースを収集し、実験に供した書籍や辞書を調べた文献

や文学研究の手段によりデータを収集した。データは最初にインドネシア語で日本とファティック助詞に終助詞「よ」と「ね」の意味を記述することで、比較、すなわち技術を用いて処理した後。この技術によって終助詞「よ」または「ね」がインドネシア語のファティック助詞に直接翻訳することができるかどうかを分析し、インドネシア語で「よ」と「ね」、日本語とファティック助詞の使用の間の等価知られているとすることができる。この手法で日本の言葉はインドネシア語に直接そこに変換することができる。できない言葉でもある理由、結果はまた、特に終助詞に関しては、インドネシア語と関連する参照間日本の対照的な問題点を補完または補足するために期待されている理由を知ることができる。

## F. 研究の体系

### 第一章序論

第一章では、筆者は問題の背景、問題の範囲、研究の目的、研究の意義、研究方法、研究の体系を説明する。

問題の背景では、筆者は本研究で分析すべきだと考えられるいくつかの問題を述べる。範囲が広すぎないように、問題の範囲を決める。研究の目的と利点は問題の範囲を反映するもので

ある。研究の目的を記述することにより、筆者は問題の範囲を絞り、研究を行えるのである。研究の意義は筆者がよいことをもたらすことだと考えるものである。研究方法については、本研究のテーマに関係があるプロセスがしっかりわかるように、アプローチから研究技法に至るまで説明する。本研究は体系的に書き、重点を説明できるように研究の体系を述べる。

## 第二章基礎的理論

この章ではまた終助詞「よ」と「ね」の理論、文脈や状況によると、同様にこれまでの研究の同定結果の粒子ファティックインドネシア語について詳しく述べた。

作者をキャプチャ理論は一部の専門家だけでなく、粒子ファティックインドネシアの定義と用途に応じてよとね終助詞を使用して、終助詞定義について説明する。

## 第三章研究方法

本章は研究方法の定義、研究手段、研究データ源、それから、準備、実行、報告からなるデータ収集技法を説明する。研究方法は行う研究のプロセスと分析の仕方からなるものである。本研究で使うアプローチ、研究データ源、データ収集技法を説明

する必要があると思う。そうすることにより、筆者が行う研究はしっかりわかるようになる。

#### 第四章データ分析及び説明

この章で著者は、データ収集、ソートおよびデータの集計、データの解釈と描画の結論を実施している。意味は、関数、および文章の文脈から見ているかどうかを等価終助詞「よ」と「ね」助詞とインドネシア語ファティックを分析する。

#### 第五章結論及び今後の課題

筆者は問題の範囲に対する答えとして体系的に発見したことを結論する。次に、結論及び今後の課題は研究の結果がはっきり理解できるように、最後の章に書く。それから、今後の課題については、筆者が考えついたことだけでなく、他の研究者に研究したものを進展させて欲しいことである。従って、本研究で取り上げたテーマに関係する研究はここまで終わるのではなく、特に日本語教授法、日本語学の発展として他の研究者から反応を受けたらいい。